

## 構造地質最終号によせて

構造地質研究会は、1965年の勉強会をきっかけとして、1966年に設立されました。このたび、研究会設立40年を経て、研究会が日本地質学会構造地質部に統合されるにあたり、構造地質研究会誌として独自に刊行して来た「構造地質」が、本号で最終号となります。そこで、研究会設立当時深く関わって来られた方に声をかけ、植村 武先生、垣見俊弘先生、原 郁夫先生に設立当時の回想などをお寄せいただきました。な

お、1965年の勉強会の様子は、構造地質研究会誌の1号に掲載されています（PDFファイルで閲覧することができます）ので、ご覧下さい。なお、「構造地質」はなくなりますが、今後は地質学雑誌の「特集号」として、構造地質、テクトニクス関連の、あるいは異分野との合同の特集を組んでいくこととなります。

高木秀雄・石井和彦

## 構造研ことはじめ

植村 武

構造地質研究会が40年の歴史を終え、地質学会構造地質部に統合されるが、構造研が役割を終えたからではなく、大筋では従来通りに活動を続ける、と理解している。「初期の思い出や今後の活動の期待など」を思いつくまに以下に記す。

構造地質研究会の誕生は1965年の暮れである。会誌第1号（1966年07月）に寄せられた牛来正夫さんの「祝辞(?)」によれば、概略「岩石学は地殻形成の化学的過程、構造地質学は力学的過程を主題とする。岩石学は19世紀に入って間もなく“近代化”の道を持ちはじめ、構造地質学はおくれている。岩石学は構造地質学と双子の兄弟みたいなもの」である。垣見俊弘さん（構造地質第30号、1984）がいられているとおり、改めて敬意を表す。

同じ会誌の冒頭で、昨年亡くなられた藤田至則さんは、「構造地質研究会の発足にあたって—その2つの目的—」と題して、「第1の課題は近代化、第2の課題は総合化」である、と述べ、さらに、「レールのないところにレールをしくのが“近代化”—現代化—の本質である」といっている。“近代化”は、いろんな場合について議論されたが、いつか目にしなくなっていった。すっかり“近代化”してしまったのだろうか。そ

うでなかったら、現代的な意味における“近代化”の討論をやってみてはどうなるか。

初期のころ、研究会は会員相互の間のきびしい勉強の場をつくるのが目的とされていた。自由な発想と近代化・総合化を目指して、それぞれが新しい分野で一流の研究者を目標に、よく勉強した。若者にとって、構造研は勉強の機会だった。次第に院生の研究発表などが多くなってくると、年配の人の中には、研究者として対等平等なんだから同じに扱うんだ、といって、多少意地の悪い質問もする人もいた。しかし、若手を育てるため配慮する人が多かった。また、「自分は、構造研で育ったのだ」という人がいた。構造地質部会でも、十分若手研究者の育成に配慮してほしい。

語ることは多いが、紙数もつきた。最後に一つ。経済問題は深刻であった。構造研の巡検で、ある海岸に行った。そこは断崖の上にある原っぱで、その切り立った崖の縁を歩いていると、親切にも、「崖から離れていた方がいい。事故が起きるかも知れない!？」と、教えてくれる人がいた。構造地質もまた、研究者は就職難の時代であった。職員が一人減れば、一人の院生が職に就ける、という。

## 構造研創立の前後—私的回想

垣見俊弘

構造地質研究会は1966年春に設立された、と会誌には書いてある。それに間違いはないのだが、私はその前年、1965年の暮れに、泊りがけで行われた“勉強会”を、長い間構造研の第1回会合と錯覚していた。その時、ゲストとして呼ばれた熊沢峰夫さんと原郁夫さんの発表があまりにも強烈だったからである。

その頃の私は、数年まえから、日本の構造地質学といえば、ほとんどが構造発達史の研究に終始している

のにあきたらず、まったくの独学、あるいはごく少数で、弾・塑性論、レオロジーなどを学習し、フィールドでは平山次郎さんと、小断層解析を通じて、古応力場の復元法を、“ほそぼそと”研究していた。

そんな時、1964年に、雑誌 Tectonophysics が出現した。創刊の辞には、本誌の狙いは「構造地質学にまつわる mystery のベールをはぎとること」と、明快であった。第1巻には、大陸移動などグローバルな視点

からの論説もあったが、私はとくに、H. Ramberg の座屈褶曲や、J.F. Dewey のキンクバンド形成機構の研究に惹きつけられた。しかし、基礎学力が足りないせいで、私はそれらの内容をすべて理解できたとはいえず、あせりを感じていた。そして、日本ではまだ、こんな研究をやる人は当面現れないのではと、些か悲観的な気分になっていた。その時、私の前に現れたのが熊沢さんと原さんであった。

## 構造地質研究会の閉会で思い出すこと

原 郁夫

私の「研究の回顧」の中には、「構造岩石学研究会から構造地質研究会へ」という見出しの小節がある。その中からの引用で書かせて頂こう。

「小島先生の構造岩石学研究会」が閉じられた1965年の暮れに、垣見俊弘さんや熊沢さんらの発案で、構造地質学に興味をもつ若い研究者・学生が逗子海岸に合宿して、将来の日本の構造地質学への思いを話し合った。その時の話題提供者として南雲さんと私が選ばれた。南雲さんはBiotの褶曲理論を紹介された。私はやり始めていた褶曲の微細構造解析の結果について話した。……」。一晩泊りで翌日も午前中いろいろ話し合った。熊沢さんの提案で、年令順ということで水谷・原・熊沢が同じ部屋で川の字になって寝た。帰りの電車で、熊沢さんが、「昨日の褶曲の話をしていると、原さんは潰せそうにないね」と物騒なことを言って笑っていた。

当時、私は、変成変形岩の石英の格子配列・褶曲などの研究成果を、岩石学の講演会場に潜り込んで発表していた。そこしか場がなかった。逗子の会合より少し前であったが、金沢の学会講演で、変成変形岩の石英の格子定向配列を説明出来るという熊沢熱力学理論に対して、私が滑り系が決まってテイラー理論なんかで説明されるんじゃないかと言って熊沢さんと喧嘩になった。「原さんなんか観察しかないじゃないか」と言われて、あとは無茶苦茶の議論となり、坪井先生が仲裁に入られて、昼休みに二人でうどんを御馳走になった。その時のことや、戦後からの日本の構造地質学のことを題材に、1980年代末、平さんが司会していた「日本の地質学の将来と学会の役割を考える」シンポで話しをした(原, 1990)。その会には熊沢さんも出ておられた。構造地質研究会のことで思い出されるのは、熊沢さんである。「この頃から最近の教室の改革まで、熊沢さんには、随分お世話になった。彼は、この間、私にとっても常に豊に刺激的であった」と、私は「研究の回顧」に書いた。

発足当初の構造地質研究会について、私は、「研究の回顧」の中で、「小島先生の構造岩石学研究会をへて構造地質研究会が発足するというように、日本の構造地

質学は、新しい学問を求めて動きだしていたことは確かであった。しかし、新生界の構造解析から出発した研究者と構造岩石学から出発した研究者との間には、対話にならない歴然とした溝があり、それは長く続いた」と書いている。私が出たり、嶋本さんが出たりしていたのだが、私たちの褶曲などの研究や構造解析の方法と、新生界の地質構造解析の成果やその方法を、上手く噛み合わせて議論出来る能力も、相手を説得出来るほど幅のある能力もなかったということであろうと振り返っている。

国際的には、1970年代後半から、シドニー、ライデン、バルセロナ、ゲッチンゲンで開かれた、Microtexture Analysis Conferenceに、私は論文を提出していたのだが、当時の私には、この会合の成果を構造地質研究会のメンバーに効果的に知らせる能力も余裕もなかった。1975年ドイツから帰って小島先生の還暦記念のため、「三波川帯の造構運動」をまとめ始めた頃から、私には日本の付加体の構造解析が緊急課題であった。1980年勘米良さんのプレート・テクトニクスをベースにした日本列島地質構造論が出たのだが、その年、構造地質研究会を広島で急ぎ開催し、勘米良論文を議論したほどである。構造地質研究会誌が厚くなったのは、ここで読まれた論文を印刷した25号からである。構造地質研究会への私の貢献は、会誌を厚くしたぐらいのことであった。これを貢献と言うならばの話だが。

現代の構造地質学の成果は、私がいま関わっている地質工学(土木地質学)にとっても極めて重要なものである。そのことから考えても、構造地質研究会が何故に今閉じなければならないのか、私には理解しにくいことではある。大学の会員が環境の変化に耐えられず活力を失って、会が終焉を迎えつつあるように思え、気の毒に思える。ただ、日本の構造地質学者の研究は、カレントに流されてか同色系統が多く、国際的に展開している多様性が見られない。構造地質学の成果を利用する地質工学系の技術者にとっては、不満があることを付記しておきたい。